

# 第1回庄川流域懇談会 議事要旨

開催日時：平成19年6月19日（火）10:30～12:00

場 所：高岡平安閣 4F「平安の間」

- 議事次第：1. 開 会  
2. 挨拶  
3. 出席者の紹介  
4. 設立趣旨、規約及び運営方針について  
5. 座長選出  
6. 議 事  
①河川整備基本方針、河川整備計画について  
②流域懇談会について  
③庄川と流域の概要  
7. 閉 会

○庄川流域懇談会の設立趣意書（案）について

- ・原案のとおり承認された。

○庄川流域懇談会規約（案）について

- ・原案のとおり承認された。

○庄川流域懇談会運営方針（案）について

- ・原案のとおり承認された。

○座長選出

- ・規約第6条に基づき、座長に玉井 信行 金沢学院大学大学院教授を選出した。

○議事

- ①河川整備基本方針、河川整備計画について
- ②流域懇談会について
- ③庄川と流域の概要について

【主な意見】

（委員A）

- 今年のアユ釣りは好調で、このことは適切な水量を流していることによる

ものであると思う。

- 低水護岸には、危険と思われるところも幾つかあるので、順次補強をし、そのことについても計画に織り込んでいただきたい。それに関連して、先般、河川が相当あふれたときに、パットゴルフ場が半分割られた。それに下流を考えたときに、利賀ダムを整備をすることで安定した庄川になると思うので、利賀ダムを整備の促進が重要である。
- 河川の中の環境整備が畑上に上がっていて、この前、大門出張所の協力でホタルの里ができたが、これは流れてしまった。なおまた、そんな希望もあるので、水と親しむ環境、あるいは水と親しみながら運動などでもできる施設づくり、たとえば水辺のプラザといったものの新設が望ましい。

(座長)

- 水辺の空間の整備、水量に関しては、正常流量の中で議論が出てくると思う。
- 安全・安心という点は課題であり、流下能力が現在どうなっているのか、それを整備計画ではどの程度まで高めるのか、それが基本方針をどのくらい満足するのか、といったことを次回説明していただけるかと思う。
- 基本方針と整備計画との関係が説明いただけなかった。上位計画と整備計画の関連というようなところも課題というところで説明いただければと思う。

(委員B)

- 庄川の川底が2mほど下がっていると聞いているが、破堤や堤防への影響について、どう対応していくのかが1つの課題として考えられるのではないかな。
- 環境生態系において重要な、支川あるいは農業用水と本川とのつながり・連結がどうなっているのか調査し対応を考えていく必要があるのではないかな。

(座長)

- 今のご指摘も扇状地の急流河川ということに関連して安全面での課題、環境面での特徴が出てくると思う。そのあたりは、次回の説明で入ってくるのかな。

(事務局)

- 河床が安定している区間もあるが、低下しているところは、可能な限り河

床低下について資料をとりまとめ、第2回の課題のところで説明する。

(委員C)

- 中田橋の少し上流のほうで、伏流水を土地改良施設で利用させてもらっている。伏流水が地域に貢献するというのはかなりあると思うし、水産関係にもプラスの影響があると思うので、伏流水の現状についての資料を整理してはどうか。

(座長)

- 伏流水の調査は事務所でやっていると聞いている。
- 水の利用、環境、あるいはそれを利用した地域の産業、文化、伝統にも関係してくると思うので、伏流水も一つのキーポイントだと思う。
- 流域面積よりも氾濫原面積のほうが大きいので、流域のみを考えるのではなく、氾濫原を含めて考えたらいいのではないか。そうすると、伏流水のことも配慮できる。
- 被害を受ける高岡の市街も、大半は流域外であり、そこを考えていくのがよいと思う。

(委員D)

- 下流では、湧水が出て豊富な魚類相を形成していて非常に良いが、上流における伏没する場所では、流量が少なくなる。渇水期になると本当に小さな流れしかない。
- 庄川の自然は非常にいいけれども、地域的に細かく見ていくと、このようにもう少し改善の余地があるのではないか。
- 流量の問題で、現状では渇水時期になるとかなり苦しくなっているという側面がある。
- 庄川をもっと有効に使うときにはどうしたらいいかという観点も考慮すべきであると思う。

(座長)

- 水質や維持流量などがある地点で定められていると、それが連続的に下流全体にわたってどういう状況になるかというところは今後の議論で出てくると思う。

(委員E)

- 水量が少ないといったことが、一番端的にあらわれるのは10月のサケの

遡上である。水量が少ないということは、つまり水圧が少ないということであり、サケがなかなか遡上しない。

- 維持流量が出されていても、それが途中で地下に潜って空になっている場所もあるのが現状である。
- ダムに余分な水を貯めて、時間的に放流するといった、漁業者と発電関係者の連携などをお願いしたい。
- コンクリートの陰ばかりでは、魚が住もうにも住めないという実態があるので、魚のすめるような淀みとか深みといったものを工事の中に取り込んでもらいたい。
- 河川整備の中では、ビオトープづくりなどにも強く取り組んで欲しい。

(座長)

- 庄川の象徴的なものは、サケとアユであると思う。それらの生き物は産卵期、成育期等々でそれぞれ特徴があり、そのあたりに着目し、原案なりこれからの案において、考えを説明していただければと思う。

(委員F)

- ホタルの里やいろんな魚に触れ合う場所は、子供たちが命を見つけて、感じて、学んでいく貴重な場である。
- 子供たちの側から言うと、川を上から見のではなくて、下から土手を見上げる、あるいは川の中に入って川を感じる必要があるだろう。安全で安心して水の生物や動植物と触れ合える場所の確保も考えた整備計画が望ましい。

(座長)

- 今、全国的には水辺の楽校とか環境学習ということが言われている。

(事務局)

- 大門大橋や砺波大橋のあたりで、流域の小学生が参加して水質調査や水生生物調査を毎年実施している。昨年は大門小学校の皆さんに調査していただいた。そういった活動は毎年実施している。
- そういった地域との連携について計画の中で一つの課題になっているので、資料を準備させていただき、議論をいただければと思っている。

(座長)

- 次の世代にどういう川を残すのかという観点も非常に重要である。

- 今日いただいた意見等を、次回の庄川水系の現況と課題の中でうまく説明していただいて、議論の進展に有効になるようお願いしたいと思う。